大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

山中京子先生　送別の辞

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉武, 信二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/16216

山中　京子 先生　送別の辞

人間社会システム科学研究科　人間社会学専攻　社会福祉学分野主任
吉　武　信　二

このたび、長きにわたる社会福祉学科および専攻（分野）への貢献を果たされ、2019年３月末をもって退職を迎えられる山中京子教授に対し、僭越ながら分野主任として送別の辞を述べさせて頂きます。

山中先生は、1977年３月に津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業後、運輸省勤務などを経て1981年に米国ハワイ州立ハワイ大学大学院ソーシャル・ワーク校修士課程に進学。修了後、2001年に大阪府立大学に着任されるまでの間、神戸市民生局児童家庭課、千葉県精神保健福祉センター、東京都衛生局医療福祉部エイズ対策室の相談員や東京都精神医学総合研究所、東京大学大学院医学系研究科の客員研究員、また千葉県立衛生短期大学看護学科、東京女子大学現代文化学部、千葉大学教育学部、京都女子大学現代社会学部の講師などを務められました。そして2001年４月より、大阪府立大学社会福祉学部に助教授として着任され、2012年教授に就任。以後2019年３月までの18年間にわたり、本学の教育研究に尽力されました。この間、大阪府立大学では府立三大学統合や学域再編などの大がかりな組織改革が行われ、社会福祉学関連領域の組織は改革のたびに規模を縮小せざるを得ないような厳しい状況下にありましたが、山中先生は終始この領域で活躍され、数多くの功績を積み上げてこられました。

山中先生の研究テーマは、「HIV陽性者の抱える心理社会的ニーズとそれに対する専門職者からの支援、支援手法、支援体制」に始まり、「多職種連携・協働の概念的検討」、「女性のDV被害者の支援課題および専門職者の支援論」へ発展されてきたといえましょう。

これまでに発表されてきた著書･学術論文では、望ましい性教育のあり方に言及したもの、HIV陽性者の心理･社会的状態を比較して、陽性者に対する心理・社会的援助の領域を考察したもの、カウンセリングで用いられる援助理論や技法、医療専門職やカウンセラーの援助態度にかかわる留意点などを分析したもの、多職種連携が発生･展開するプロセスについて新たなモデルを提案し、その有効性と弊害を当事者、専門職、医療･保健･福祉のマクロシステムの３視点から考察したものなどがあり、本誌にも投稿されています。さらに、DV被害者の支援に関しては、女性被害者への支援論を踏まえ、多様な被害者への支援を検討したものなどもあります。

一方、学生教育においては、医療ソーシャルワーカーとして就職する学生を支援されながら、担当する医療福祉論では保健・医療領域でのミクロ、メゾ、マクロレベルの支援の課題と方策について、社会福祉実習では特に医療機関で働く医療ソーシャルワーカーの活動に関する実習を指導、教育福祉インターンシップでは2010年より９年間にわたってハワイスタディーツアーを引率されてきました。そして、コラボレーション論という授業では、看護・総合リハビリテーション・教育福祉といった異なる３つの学類の学生に合同授業を企画および実施するという他の科目にはない独創的な授業方法を通して、多職種連携・協働の理論をより実践的に展開され、非常に高い教育効果を上げてこられました。また、大学院生に対しては、ソーシャル・ワークや連携・協働に関する原著論文の輪読などから、特に社会人（医療ソーシャルワーカーや自治体福祉職）が現場で感じた疑問や課題を学術的な研究として練り上げる教育に力を入れてこられました。

このように学生教育に熱心だった山中先生ですが、その教えを受けた学生たちの多くは授業の内容だけでなく、山中先生のお人柄にも強く惹かれていたように私は感じました。親子以上に年齢差のある女子学生が口々

に「エレガントでかわいい先生」と言っているのを何度も耳にし、その上品な振る舞いへの憧れを持っている様子がうかがえました。

同僚である私にとっても山中先生は、やさしいお姉さんのような存在でした。初めて先生にお会いしたのは、現在の学士課程組織である教育福祉学類準備会議で、私は他の部所からの転籍予定教員としてこの会議に参加しました。ほぼ全員が初対面の私に対して、どの先生方も皆さん温かく接して下さったのですが、その中でも会議終了後に「今から私たちここでお昼ご飯を食べようと思っているんだけど、よかったら一緒にどうですか？」と声をかけて下さったのが山中先生でした。初めてお会いしたとは思えないような気さくな雰囲気で食事をご一緒させて頂き、不安だった私が新しい組織に溶け込むきっかけを作って下さいました。その後、私が学類の主任になって慣れない業務に悩んだとき、山中先生は副主任で多くのサポートをして下さいました。学類で大きな問題が発生したときも、困難な状況に率先して正面から立ち向かう姿勢を示され、厳しさとやさしさの両方を持ち合わせたそのお人柄に随分と励まされたことを思い出します。

このように、学生にとっても同僚にとっても存在感の大きかった山中先生が職場から去ってしまわれるのは、組織にとって大きな痛手であることはいうまでもありません。しかし、残された私たちはその痛手を克服すべく、さらに研究教育に精進する覚悟をしなければなりません。それが、これまで山中先生から頂いた数々のご厚意や大きな功績への恩返しになると信じ、さらなる飛躍をここに決意したいと存じます。

最後になりましたが山中先生、退職されましてもどうかいつまでもお元気で。先生の今後益々のご健勝を祈念しつつ、これからも本学の名誉教授として後輩の私たちにご指導、ご助言を頂ける機会をもって頂けることを期待し、送別の辞とさせて頂きたいと思います。

長きにわたり、本当にありがとうございました。